

株式市場における自己充足的投資行動

増川 純一（成城大学）

経済物理学は、主として、物質の世界で培われた統計物理学の手法を援用し、経済を題材とした実証主義的研究を行う出来たばかりの物理学の領域です。

株式などの金融市場はデータの豊富さから、経済物理学が好んで取り上げるテーマの一つです。効率的市場仮説が、株価の変動要因を専ら市場にもたらされたサプライズに求めているのに対し、内生的価格形成（ニュースと直接対応しない価格形成）が重要であり、ブラック・マンデイなどはその一例と考えられます。それらはサプライズによる価格変動と現象として何が違うのか、そして、その背後にはどのような市場参加者の行動があるのか。

ここでは、株式市場の電算化により豊富に蓄積された約定データ（ティック・データ）やオーダーブックを用いた詳細な実証研究、市場参加者の行動をモデル化した数理モデルやエージェントベース・モデルを用いた考察から、経済物理学が構築しようとしている複雑系としての株式市場像を紹介し、行動経済学との接点を議論したい。